

危機的な下肢虚血のある糖尿病患者における末梢血管インターベンション (血管内治療) に薬剤溶出性バルーンを使用した効果

膝下のバルーンによる血管形成術 1 年後の再狭窄率は 70% である。この研究では、危機的な下肢虚血のある糖尿病患者に対し、膝下の動脈の血管内治療としてパクリタキシルによる薬剤溶出性バルーン (DEB) または従来の経皮的経管血管形成術 (PTA) を施行した場合の再狭窄の減少について比較検討した。被験者の条件は、糖尿病、危機的な下肢虚血、最低 1 カ所の膝下の血管における著しい狭窄や閉塞、余命 1 年以上とし、132 人の患者の膝下のアテローム性動脈硬化部位 158 カ所が対象となった。再狭窄については、90% 以上の患者に血管内造影を行って評価し、薬剤溶出性バルーン (DEB) 群では 27%、経皮的経管血管形成術 (PTA) 群では 74% にみられた。また、血管再生はそれぞれの群で 18% 対 43%、特定の血管の閉塞は 17% 対 41% の比率でみられた。したがって、危機的な下肢虚血のある糖尿病患者において、薬剤溶出性バルーン (DEB) は従来の経皮的経管血管形成術 (PTA) と比較して、1 年後の再狭窄、血管再生、血管閉塞を著しく減少させることが示された。

出典 : Circulation 2013. Jun 24.